

## はじめに

西川長夫

今回の「研究報告」(9)には、『三つ目のアマンジャク』に関する内藤由直の論考「松下清雄『三つ目のアマンジャク』論—絶望を生き抜くことの痛み」、同じく内藤氏に翻刻・解説をお願いした松下清雄の西川長夫宛の手紙(「松下清雄から西川長夫への手紙」第2信, 2001年1月26日)と自己の作品に対する批評文(「松下清雄の長篇小説『三つ目のアマンジャク』について」)の三篇が収められている。

私たちの「研究報告」の最終回は、『三つ目のアマンジャク』に関する論考や資料の特集で締めくくりたいというのが、この企画を始めた時からの私の希望であった。それはこの長篇小説が、きわめて独自のやり方ではあるが、まさしく「戦後の農民運動と農村の変容」という、私たちのテーマに他の何よりも真つ当に込められている作品に思えたからである。『三つ目のアマンジャク』が出版されて送られてきた時、私はまずその重さに驚き、表紙の絵とタイトルを見て二度驚いた。最初のお手紙をいただいたときの返信で、私は貴重な歴史的体験を後続の世代に伝えるために、ぜひ自伝か自分史のようなものを書いてくださいと、お願いしていたからである。だが作品を一読して、私は自分の不明を恥じるとともに、この特異な長篇小説が文学としても、日本の戦後小説の十の傑作のひとつに数えられる優れた作品であることを確信した。

『三つ目のアマンジャク』の物語は、長い漂泊の旅を経て生まれ故郷の村に帰ってきた主人公が、かつての同志であった旧友の自死を知るところから始まっている。食肉センター設置に反対して行われた全村挙げての闘争の勝利がもたらしたものは、結局は村の退廃と瓦解という誰の目にも明らかな現実であった。この物語の舞台は山間地の寒村(著者によれば北関東から南奥羽にかけての一農村)であり、登場人物はすべて農民である。だがこれほど過去のいわゆる「農民文学」から遠い異質な作品も少ないだろう。この小説にはリアリズムを主調とする旧来のいわゆる「農民文学」や「農民史」などでは描ききれない農村と農民の姿が、全く独自の手法で描きだされている。『戦後農民運動史』(1959年, 大月書店)の著者であった松下清雄氏は、しかしそのような理論的枠組みでは、またそのような文体と記述の方法では、農村も農民も農民運動も、そしてそれに深く関わってきた人間の生きられた体験も十分には描ききれないことを、小説の主人公のように運動と村を離れてさ迷った半世紀に近い旅の間に、一層強く感じとっていたのではないかと思う。(『戦後農民運動史』については「研究報告」(1)所収の安岡健一論文「同時代の運動史を書くということ—渡辺武夫(松下清雄)『戦後農民運動史』(1959年, 大月書店)を読む—」を参照されたい。この示唆に富んだ論考は、『戦後農民運動史』から『三つ目のアマンジャク』へという視座の下で書かれている)。

この「研究報告」(9)に収められた内藤由直論文では、小説作品を伝記や運動史の資料として読むのではなく、作品を作品として読むという極めて正当で正統的な立場を守って、作品の

構造や文体、人物の描き方、さらにはそこに描き出された村落共同体や農民運動の内部の矛盾や暗部、「両義性」や「原罪」などについて（村に伝わる人柱の物語、村の外れに入植してきた旧満州開拓民たちの排除、食肉流通センター反対運動における差別意識、あるいは裏切り行為、等々）、実に見事で精緻な分析がなされている。最初の本格的な『三つ目のアマンジャク』論であり、今後この論考を無視してこの作品を論じることはできないだろう。私は皆さんにこの論考を直接自分の目で読んでいただきたいので、ここでこれ以上詳しく触れることはしないが、前回（「研究報告」(8)）の『青草火』論に続いて、若い世代の研究者たちがそれぞれの仕方、松下清雄の呼びかけに、正面から応えてくれたことを喜び、感謝したい。

今回の「研究報告」には、『三つ目のアマンジャク』との関わりで、松下清雄の文章を二篇、いずれも内藤由直氏に翻刻・解題をお願いして掲載することができた。第一の文章は西川長夫宛の私信であり、公表を躊躇する気持ちも強かったのであるが、内容の重要性から見ても私蔵すべきものではないと考えて掲載していただくことにした。松下さんからいただいたこの手紙には、私としてもさまざまな思いがあり、記しておきたいことも多いが、ここでは二つのことに限って指摘させていただきたい。その一つは、ここには松下さんの「農」と「農民」、したがって農民運動に対する深い思いが、松下さんの独自の生き方の哲学とともに、「工」に対する「農」、「農的人間」、「後れを生きる人間」への共感として記されているということ。それは、社会主義も結局はその一端を担ったことが露呈した、「進歩」と「文明」、つまりは西欧的近代に対する根底的批判であり、『三つ目のアマンジャク』を書く根底にあった心情であり信条であったと思う。もう一つは、これは文中に引用されている私の二十数年も昔の著書『スタンダールの遺書』（1981年、白水社）に関わることであるが、松下さんが自分を「北方的」人間と規定し、スタンダールにおける、あるいはそれを越える「南方的」なものへの憧憬が述べられていることである。私のスタンダール論はその表題から予想されるように、またその第一章のタイトルが「スタンダールの晩年—冬のイタリア紀行」からも推測されるように、スタンダールの「晩年」と「冬」に照明が当てられている。スタンダールの「路上で死ぬのもわざとでなければ滑稽でない」という言葉を引いて、彼のいわば「のたれ死にの思想」に対する共感が基調になっていた。しかし松下さんはそうした「のたれ死に」が南方的な一種の快樂主義と表裏一体のものであることを見抜き、そこに自分の南方志向を重ねている。松下さんのこの鋭い読解は、私にとって自己発見につながる驚きであり、この上ない喜びであった。（松下さんの「北方的人間」については、私たちの「研究報告」(2) (3) に掲載した未発表の自伝的小説『少年の冬』を参照いただきたい。）

第二の文章、作者自身による『三つ目のアマンジャク』論は、内藤氏の解題にもあるように、二人で町田市のお宅に伺った折に、残された大量の原稿の間から見出されたものであり、思いがけない貴重な発見であった。作家自身が自作を語るの珍しいことではないが、これほど自作との距離をとって見事な分析がなされている例は少ないと思う。これは読者にとって大きな贈り物であった。内藤氏の解題が、この書評の最終段落に記された「志」について注目してくれているので、私はここではその直前の段落に記された「この小説の持つ深い同時代性」を指摘しておきたい。論者はこの言葉に続いて『三つ目のアマンジャク』に付された「まだ見ぬ読者へ—「あとがき」にかえて」から次の言葉を引用している。「この小説の“とき”は1989年を頂点とする世界史的転回の、私が21世紀への扉口と信ずる時期であり、“ところ”は北関東か

ら南奥羽にかけての一農村です。この歴史的な転回期を人は、世は、時代は、そして私たちはどう生きたか。それが大きな問題です。この小説は、それに真っ向から取り組みました。」だが大部分の読者は、この小説をそのようには読まなかったのではないだろうか。この小説には、「ソ連の崩壊、東欧社会主義体制の瓦解、ベルリンの壁、天安門事件」などが直接には描かれていないからである。これはこの作品の最も重要な部分であり、様々な解釈が考えられる。

ここで私の読み方を述べさせていただけば、この小説において1989年が最も深く刻まれているのは、主人公おれメの思考と行動である。私はおれメが同志であり親友であった与五に代わって棺に入り、自ら千尋の谷に落とされてゆく、壮絶な、この小説の最後の場面に、89年に対する作者の答えを見たと思ったのであるが、間違いだろうか。戦後知識人の多くは、社会主義社会の到来と建設を説いていた。89年の衝撃を彼らは如何に受け止め、彼らの読者にどう答えるのか。私は注意をこらして見ていたが、89年に真っ当に答えた知識人は、皆無と言いたくなるほど少なかった。それは驚くべき裏切りであり、退廃であり、この退廃は今日まで続いていると私は思う。松下清雄は『三つ目のアマンジャク』を書きあげることによって、89年に誠実に応えた数少ない戦後知識人の一人だというのが私の結論である。

なおこの報告書の最後のページには、九回にわたる「研究報告」の総目次が掲載されている。その目次をたどりながら、改めて思い出すことも多い。三年余のささやかな努力の積み重ねであり、決して満足できる成果ではないが、私たちが目指した研究の方向性と基盤となるべきものは示すことが出来たのではないかと思う。ここまで来るについては、実に多くの方々のご協力や励ましをいただいた。最後に、松下静枝夫人や松下忠夫氏をはじめ御親族の方々、松下清雄氏のかつての同志や旧友の方々、研究会に集まってくれた研究者の方々、このプロジェクト研究の切っ掛けを与えてくれた国際言語文化研究所の前所長の中川成美氏、毎回の「研究報告」の編集や校正などに尽力いただいた宇治橋奈名子さんや研究所のスタッフの方々、その他、すべてのお名前を記すことは出来ないが、私たちのプロジェクトを支えて下さった皆様方に、心からの感謝の気持ちを記させていただきたい。

#### <お詫びと訂正>

『立命館言語文化研究』第22巻2号掲載の「研究報告」(8)において、大池文雄氏の出身校を早稲田大学であるかのような誤った記述があり(91頁5～6行)、大池氏から誤りの指摘と訂正の申し出がありました。大池氏は、旧制水戸高等学校第3学年中退で、直ちに共産党の茨城県委員のオルグになり、以後ほぼ9年間党に在籍されたとのこと。筆者の不注意により、大変な御迷惑をおかけしてしまいました。お詫びと訂正を記させていただきます。

西川長夫